

レヴィナス『実存から実存者へ』の文法論的読解

堀松 辰彦

20 世紀に西洋思想は「言語論的転回」を経験し、いまや言語的な観点なしに哲学を語ることは難しくなっている。実際、現代思想の二大主流たる現象学と分析哲学は、もともとフッサールおよびフレーゲによる論理についての研究に端を発している。また、フランスの言語学者バンヴェニストは「思考の範疇と言語の範疇」において、アリストテレスの提示した諸カテゴリーが古典ギリシア語の文法構造に従って形成されていたことを見事に示した。現代思想は言語を中心に展開されている。

このような文脈を意識しつつ、私はエマニュエル・レヴィナス(1906-1995)の哲学に「文法」という観点から問いを立ててみたい。しかし、そのためにはレヴィナス哲学において「文法」(本稿においては特に品詞)をひとつの中心主題として選び出すことの妥当性を検証しなければならない。「文法」という言語的な観点からレヴィナスのテキストを読解するための内在的な動機を見出すことはできるだろうか。それが見つければ、私の問いはその根拠を得ることになるだろう。

目下の目標に達するために、レヴィナスのユダヤ的テキストを検討することにしよう。レヴィナスは自身の哲学的テキストとユダヤ的テキストとを出版社の使い分けによって区別していたが、それでもユダヤ的なテキストから哲学の話題が排除されているわけではない。むしろレヴィナスはユダヤ的テキストにおいて、一定の距離を保ちつつ哲学について語っているように見える。『困難な自由』に収録されている「身分証明書」において、レヴィナスは西洋ユダヤ人の自己同一性を問いに付している。まさに彼自身が西洋ユダヤ人であるが、レヴィナスはそこでユダヤ教が「普遍的な語り」、具体的には哲学と文献学を支えるのだと主張している(DL76)¹。まさにここでレヴィナスは、西洋ユダヤ人として哲学を俯瞰的な視点から見ている。

「身分証明書」で問題になっているのはもちろんユダヤ教なのではあるが、そこでは同時に世俗的な大学についても議論がなされている。レヴィナスの大学についての記述を通じて、われわれは彼の哲学に対する態度を見ることが出来る。レヴィナスは、聖書の「申命記」が再発見され、ヨシヤ王がその内容に従ってユダ王国を再建したというエピソードを紹介しつつ、そこに、文学に生気を与えている「息 *souffle*」を見出した(DL77)²。そして、レヴィナスはこの宗教的な議論を世俗におけるルネサンスとの類比で考えている(DL78)³。一般にルネサンスとは古典文化の再興であり、ヒューマニストたちはルネサンス期に古典作品をギリシア語やラテン語で正確に読もうとしていた。レヴィナスはルネサンスを哲学含め世俗的な研究のモデルとして提示し、そこでテキストに現代的な意味を担わせる営みを見ていた。

このような意味で、文法は正確な読解を可能にし、新しい意味を見つけ出すための条件である。とはいえ、レヴィナスは文献学が哲学を飲み込んでしまわないようにも注意を与えている。レヴィナスにとって、正確な読解とその結果生まれる新しい意味との間にはなお距離がある。われわれの問題はこの両者の関係を探ることにある。それゆえわれわれはレヴィナスの哲学を文法という観点から見通すことを試みる。

しかし、われわれは単にレヴィナスを正確に読もうとしているだけではない。そうだとしたら、それは当然の方針にすぎないだろう。われわれは文法学的な起源をもつレヴィナスの概念における「人間的価値」を探求してゆく。文献学的とも言える文法の、その哲学的意味を考えてゆくのである。事実、われわれの研究対象である『実存から実存者』において、レヴィナスは動詞、実詞、分詞といった品詞にそれぞれ現実的な意味を付与している。

われわれの第一の分析対象は『実存から実存者へ』である。このタイトルがすでに、われわれの方法に適合して、動詞から名詞への移行を示している。われわれは文法論的にレヴィナスの『実存から実存者へ』を読解してゆく。文法論的というのは、特に品詞の概念に注目するということである。ハイデガーの有名な「存在論的差異」は、存在するという動詞と存在者という名詞の間の区別のことであった。レヴィナスの品詞論はこの存在論的差異に端を発している。レヴィナスは存在論的差異を独特な仕方ですり受けながら自身の思想を開始し

た。レヴィナス自身の証言によると、「ある *il y a*」と呼ばれるレヴィナス独特の概念が彼の思想全体を導いている(EI43)⁴。以後変遷はあるが、『実存から実存者へ』において「ある」は端的な存在概念として提示されている。本稿でわれわれは品詞を表す語に注目しながら、「ある」から自己の存在が成立し、それが引き受けられる（あるいは引き受けられない）ところまでを見届け、そのモデルを提示する。

本稿は4節から成る。レヴィナスはハイデガーの存在論的差異を受け継ぐときに、それを存在 *être* と存在者 *étant* ではなく、実存すること *exister* と実存者 *existant* の差異として導入した(TA24)⁵。実存すること *exister* と実存 *existence* はほぼ交換可能と言ってよい。実際、『実存から実存者へ』のタイトルにおいて用いられているのは実存 *existence* である。第一節ではそれに向けて、レヴィナスの実存 *existence* 概念を、最初期の論考「逃走について」から確認する。「逃走について」において、実存は存在者において容赦なく作動している。次に第二節では、『実存から実存者へ』における実存者なき実存（非人称動詞）たる「ある」が最大の主題になる。この先鋭化された概念を自己（の欠如）という観点からモデル化する。第三節では、「ある」という自己なき状態から眠りという事象によって、実詞 *substantif* としての自己と、自己の存在が成立する場面を見る。第四節では、レヴィナスが提示するダーウィンの生存競争の一解釈を確認し、そこでレヴィナスが *s'être*（自己を存在する）という破格の表現に託したところの、主体が自己の存在を引き受ける仕方について論じる。最後に結部で品詞という観点から『実存から実存者へ』の議論を総括し、さらに時間という観点から以降のレヴィナス思想への見通しを立てる。

第一節 純粹存在の経験

『実存から実存者へ』に先立つ、レヴィナスの最初期の論考「逃走について」(1935)でレヴィナスは存在からの逃走の欲求として、「吐き気 *nausée*」というサルトルを思わせる際立った経験を記述した⁶。『実存から実存者へ』でレヴィナスは「ある *il y a*」という極限的な存在概念を提示したが、「逃走について」ではそれに先立って存在概念が規定されている。レヴィナスが「ある」という概

念に至るまでの前史をまずは確認しておきたい。「逃走について」では存在に本性 *nature* と実存 *existence* という区別が設けられ、形容詞的とも言える本性から区別された動詞的な運動としての実存と、そのようにして実存するものとの関係に焦点が当てられている。

「逃走について」においてすでに、レヴィナス思想には、ハイデガー的な存在論的差異と異なる点が見られる。レヴィナスは言う。

存在は存在する *l'être est*. ある存在においてその実存のみを考慮するとき、この肯定に付け加えるべきものはないのである(DE93)⁷

ここでレヴィナスは存在 *être* をあたかも存在者であるかのように語っている。このことは、「存在者の存在は、それ自体、一種の存在者「である」のではない⁸」と言うハイデガーからすでに一定の距離を置いているかのようなのである。レヴィナス自身の存在概念はまず、「逃走について」のこの箇所に戻せられるだろう。

レヴィナスは、実存とは「存在は存在する」という肯定作用に尽きていると言った。この作用は「自己同一性 *identité*」とも言い換えられる。

実存は、他のなにものにも準拠することなく自己を肯定する *s'affirmer* 絶対者である。それは自己同一性なのだ(DE98)⁹

実存は、あるものがなおそれ自身であるという、再帰的な構造として提示されている。レヴィナスは自己と同じであるという自己同一性に、ある意味で、動的な性格を付与している。自己同一性として、存在における実存とは、自己がなおそのようにあるという運動なのである。

「逃走について」でレヴィナスは、不快感および吐き気という事象の分析を通じて、自己同一性が自己への繫縛として苦痛になる瞬間を記述している。吐き気を催したときには、われわれの身体内部に不快感が現れている。そして、ここで嘔吐するわけにはいかないというとき、われわれが自己自身に「釘づけ」になっていること（実存の肯定）、その「釘づけ」からは逃げられないこと（実存の否定の不可能性）が経験されている。これが、レヴィナスが「純粹存在の

経験」と呼ぶものである。われわれがわれわれ自身であり、われわれ自身であることをやめられないということが、「逃走について」のレヴィナスの実存概念に含みこまれている。レヴィナスは、吐き気において実存という動詞的運動が否定しえずに課されるところを見ている。

レヴィナスは「吐き気」に動詞や名詞という単一のカテゴリーを超えたものを見ている。

それ〔吐き気〕は実存そのものなのか、単なるひとつの実存者なのか？ とう問することは、吐き気を構成し、われわれという存在者の存在そのものの達成を吐き気に見られるようにする独特な含意を忘れるということだろう(DE118)¹⁰

レヴィナスにとって「吐き気」とは、単なる存在でも単なる存在者でもなく、「存在者の存在が存在する」という事実を際立って示す事象であったと言える。

そして、レヴィナスは「存在が存在する」という事実を超えて、『実存から実存者へ』で現実の基底に「ある」という事実ないし出来事を見出すことになる。「ある」という事実は名詞的存在者を含まないものであり、「ある」という出来事は、その主体をもたないものである。すなわちレヴィナスの言葉で言えば、「ある」は無名 *anonyme* であり、非人称的 *impersonnel* なのである。次節より、「ある」という場面と、そこから自己が立ち上がることを再構成して記述してゆく。

第二節 実存者なき実存

『実存から実存者へ』という著作のタイトルは、端的にその著作の方針を示している。すなわち、実存者という名詞的実体の手前に実存者なき実存を見出し、実存から実存者への移行を示している。ただし、その著作の記述は、ハイデガーの存在論的差異を導入したうえで、実存者が実存するというその営みの分析から始まり、最後の章でようやく実存から実存者への移行そのものを扱うという構成になっている。つまり、『実存から実存者へ』は、記述の順序として

は「実存」から始まっているわけではない。そして実存から実存者への移行が論じられた後、その実存する実存者のあり方はもはや論じられない。実際、『実存から実存者へ』の記述は円環構造をもっている。『実存から実存者へ』の記述において、主体は目覚めて「ベッドマットに足を置く」という行為から始まり、「眠り」によって論が閉じられる。大枠として、『実存から実存者へ』は明日につながる一日（ないし平日と休日から成る一週間）の生活というモデルになっている。

それゆえ、『実存から実存者へ』を読むとき、われわれはある種のねじれを見ることになる。つまり、目覚めはすでに眠りを前提としているのに、記述においては両者が切れてしまっているのである。『実存から実存者へ』はだまかには「実存する実存者」、「世界内の対象に向かう実存者」、「実存者なき実存」、「実存から実存者へ」、という順序で記述され、最初と最後の接続は決して自明ではない。『実存から実存者へ』を最初から読み進めるならば、それは前提が欠けているわけであり、なおさらである。

レヴィナス自身の『実存から実存者へ』の記述は、混沌とした出来事のなかで名前をもつ主体の出来するというのを強調する効果を生んでいるが、われわれはこの著作全体の枠組みをとらえるために、レヴィナスの自己論を結論に置く¹¹。つまり、われわれは『実存から実存者へ』という著作を、実存者なき実存、実存から実存者への移行、実存者とその存在、自らの存在を引き受ける実存者という順序で構成してゆく。

本稿でわれわれは、『実存から実存者へ』における自己の存在論モデルを再構成してゆく。われわれは、自己の構成が成立していない段階を出発点として選び、すなわち「ある」という事実ないし出来事を出発点に設定した。「ある」は実存者なき実存であり、世界なき実存であり、一日のなかで言えば夜である。以下の論述で、われわれは「ある」という出来事から自己が立ち上って引き受けられるまでを見届ける。

『実存から実存者へ』において、レヴィナスは「実存者なき実存」と題された章で極限的な出来事を導入する。「実存者なき実存」というタイトルがすでに、動詞としての存在の純粹形態を予告している。

全ての存在が、事物も人物もみな、無に帰したと想像してみよう。この無への回帰をあらゆる出来事 *événement* の外に置くことはできない。しかし、この無そのものはどうだろうか。(EE93)¹²

レヴィナスはこの無は依然として「なにごとかが起こる *quelque chose se passe*」ことだと言う。明らかにそこにはなにもものもない。しかし、レヴィナスはこの無において、あらゆるものが否定されたとしてもなお否定することのできないような出来事の見るのである。ここでレヴィナスは、この無の否定においても無がなお舞い戻るという出来事を「ある *il y a*」という言葉で名指した。

« *il y a* »というフランス語の表現は「...がある」と言うときに使われるごく日常的な表現である。ただし、あると概念化された出来事においてはなにかがあるわけでもない。単に「ある」のである。なにかがあるわけでもないがあるという特徴について、レヴィナスは非人称的という規定を与える。文法的には、「*il y a*」の« *il* »が« *il pleut* (雨だ) »や« *il fait chaud* (暑い) »のように、三人称代名詞の非人称用法で使われているということが「ある」の非人称性を表現している。「ある」は名前をもつ人や事物の行為や状態ではなく、ゆえにそれは存在一般ないし実存者なき実存と呼ばれている。

レヴィナスが促すところの「想像上の破壊」としての「ある」は、直接的には現実の出来事を記述しているのではないが、レヴィナスは夜の不眠という経験においてあるの実現を見ている。

あたりに浸みわたり、避けることのできない無名の実存のざわめき [ある] を引き裂くことの不可能性は、特に眠りがわれわれの求めから逃れるような時に現れる(EE109)¹³

レヴィナスは現実において不眠のさなかに眠りを求めることを、先の想像上の破壊における否定作用と重ねている。われわれは不眠状態のとき、眠り、すなわち意識活動の停止を求めるが、なおあらゆる事物が不在であるというその

ことがひとつの現前として働く。このように全き不在そのものが現前作用をもつということが、レヴィナスの論じる不眠におけるあるとなっているのである。

レヴィナスは、社会学者レヴィ＝ブリュールのいう「融即 participation」という状態においてあるを見出す。

プラトンの類の分有 participation とは根本的に区別された〔レヴィ＝ブリュールの〕神秘的な融即 participation においては、諸項の自己同一性は失われる。諸項はみずからの実体性を構成するところのものを脱ぎ捨てる。ひとつの項の他への融即はひとつの属性の共有に存するのではない。ひとつの項が他である *un terme est l'autre* のだ。存在する主体によって支配されていた各項の私的な実存はその私的な性格を失い、不分明な基底に回帰する。ひとつの項の実存が他を満たし、まさにそのことによってそれはもはやひとつの項の実存ではなくなる(EE99)¹⁴

レヴィナスによると、主体はレヴィ＝ブリュールの「融即」において自他の区別がなくなることによって自己同一性を失い、同時にその私的な実存を失う。レヴィ＝ブリュールは「融即」という概念を「未開」社会における集団表象を説明するために用いていた。そのような社会においては、矛盾律のような合理的思考がつねに妥当しているわけではない。レヴィ＝ブリュールは合理的思考を拒む事象が固有の思考様式を有していると考えたのである。彼によると、「未開」社会の集団表象においては矛盾律が前提とされることなく、神秘的力、効果、性質、作用が授受されるのだという。そのように同一性を超えた原理として、レヴィ＝ブリュールは融即を規定した¹⁵。

では、レヴィナスはレヴィ＝ブリュールの融即をどのように自身の不眠についての議論と結び付けていたのだろうか。夜の不眠においては、あらゆるものの不在がそれ自体、執拗な現前としてはたらく。われわれが意識の現前を否定しても、否定された一切のものの不在のはずの夜の闇が現前として作用する。ここで、「一つの項が他である」という矛盾律を超えた定式が実現していると言える。不在がそれ自体、現前として作用するのである。それゆえ主体は不眠において、自ら否定するもののただなかで自己同一性を失うことになると思われる

ことができるだろう。

不眠における同一性なきなものかの状態をレヴィナスは「不寝 *veille*¹⁶」という言葉で指している。レヴィナスにおいて「不寝」とは、その同一的な行為者も、目指す対象もないような注意作用である。

不寝に見張る *veiller* べきものかもはや何もないときに、そして不寝にいる *veiller* あらゆる理由が不在であるのにもかかわらず、ひとは不寝にいる (EE109)¹⁷

不寝の状態においては宙に浮いた注意作用が働いている。そして眠りを求めて現前を否定しても、目覚め *réveil* としてあるという不在が現前するという出来事が回帰する。したがって、不眠の経験としてのあるは次のように規定できるだろう。まず、主体も対象もない宙に浮いた作用が働いていること、そしてそこで万物が不在であるという事実の現前が否定しえないこと、あるいは不在の現前が、その否定をかいぐって、回帰することである。この前者は「あるにおける作用」、後者は「あるという出来事」と呼ぶことができるだろう。

「不寝」の状態においては宙に浮いた注意作用が働いている。そして眠りを求めて現前を否定しても、「目覚め *réveil*」としてあるという不在が現前するという出来事が回帰する。したがって、不眠の経験としてのあるは次のように規定できるだろう。まず、主体も対象もない宙に浮いた作用が働いていること、そして万物が不在であるという事実の現前が否定しえないこと、あるいは不在の現前が、その否定をかいぐって、回帰することである。この前者は「あるにおける作用」、後者は「あるという出来事」と呼ぶことができるだろう。

さしあたり、われわれはあるに二つの動詞的な非人称の働きを認めた。あるにおいて前意識的な作用が働いていることと、あるが否定をかいぐって回帰するという出来事が起こることである。前者は空間的な作用であり、後者はあるを現在の外に追いやれないという、時間的な不可避性であると言えるだろう。

第三節 定位

あるにおいては非人称の警戒作用だけが働いていた。そこでは主体が自己同一性を失っている。つまり、非人称の警戒作用には出発点がなく、それは宙に浮いた作用になっている。なんであれ作用を発する主体が成立するためには、出発点となる必要がある。そして、レヴィナスは出発点を確立する働きを「定位 position」と呼んだ。レヴィナスは眠って「休む reposer」という行為に主体の条件を見出している。

眠るために横になり、隅で丸くなりながら、われわれは自己をひとつの場所にゆだねる。——その場所は、土台として、われわれの避難所になるのである。そのとき、われわれの〈存在する〉という営みは休む reposer ことだけに存する(EE119-120)¹⁸

自己がただ繰り返し「ここ ici」に位置取るといふ営みが、「休む〔再定位する〕 reposer」といふ表現によって含意されている。レヴィナスは意識がそのつど「ここ」といふ位置をもつという事実を指摘し、定位するといふ純粋な作用を眠りのうちに見出したのである。「ここ」といふ場所は意識の「条件＝ともに与えられるもの condition」である。

意識は土台を「もっている」、意識は場所を「もっている」。邪魔にならないような、条件たる唯一の所有である。意識はここに存在するので(EE120)¹⁹

また意識の「ここ」において、身体が存在が成立する。「ここ」に存在するというのは、無際限に広がるあるから身体の内側に避難し、内部を作り出すことである。

身体は定位である。身体はあらかじめ与えられている空間に自己を状況づけるのではない。身体は局所化という事実そのものによる、無名の存在に

おける切開 irruption²⁰である(EE122)²¹

ただし、眠りにおいては身体が存在しないし活動はさしあたり引き受けられていない。

眠ること、それは心理的および身体的活動を宙づりにすることである (EE119)²²

眠りによって、端的に「ここ」に存在するという営みが成立する。それは場所を持つということである。存在一般としてのあるは、「ここ」という場所に限定され、この場所は意識の作用の出発点になりうる。眠りによってあるは「ここに存在する être ici」に変わるのである。レヴィナスは「イポスターズ hypostase = 実詞の出現²³」が「私的な領域の出現」を意味すると言い換えている。したがって、内部という「私的な領域」を伴って場所に定位するもの、これが実詞の十全な規定になるだろう。これは確かに、実詞 substantif（下に立つようなもの）という表現の意味合いを汲んだ規定になっている。「身体は存在は出来事の秩序に属し、実詞の秩序には属さない」と言われるように、身体という「私的な領域」そのものは「宙づり」にされていて実詞の規定からは排除されている。

第四節 実存する実存者

すでにわれわれはどのように主体が行為のための出発点、つまり自らの場所を得るかを見た。しかし、『実存から実存者へ』において、ここに存在することは、「ひとが存在する」ということの十分条件にはなっていない。ただここに定位するという営みは、主体による存在の引き受けを伴っていないのである。レヴィナスはこの主体による存在の引き受けという観点から「生存競争」を読み替えてゆく。

『実存から実存者へ』の導入部に続く章「実存との関係と瞬間」では、ダーウィンの生物学に発する「生存競争」を、哲学的により深い水準で理解することが問題になっている。『実存から実存者へ』において、「生存競争」は、自己

を存在する *s'être* という破格の表現によって理解されることになる。レヴィナスはそれを単に既にある自己を保存するのではなく、そのつどの「誕生」として捉えている。

「実存との関係と瞬間」は『実存から実存者へ』の本文の始めに位置し、主体が、自己に縛られながら、行為し、あるいは行為を拒否する様が記述されている。そこでは倦怠 *lassitude*、怠惰 *paresse*、努力 *effort*、疲労 *fatigue* という状態が自己概念と密接に関連しながら分析されている。われわれにはそれぞれそのつどの自己があり、レヴィナスは「実存との関係と瞬間」において「壊れた世界(EE25)²⁴」を問題にしている。つまり、死なないために食べ、飲み、暖をとる(EE68)²⁵」ということが意識されるような、自己の外の世界が壊れてしまった状況が問題になっている。

レヴィナスは存在するという営みについて「だれかは存在を引き受けると、そのときから自己の存在を実存する(EE141)²⁶」と言う。『実存から実存者へ』において、主体による存在の引き受けは、自己の引き受けと等価である。レヴィナスはこの自己の引き受けを「瞬間 *instant*」の分析によって記述する。その分析を素描すると、ひとはその出発点としての自己(の場所)を所有しており、そのうえで自己の存在(身体)を作動させるべく、再帰的に自己の存在へと向かう、ないしそれと一種の関係をもつということになっている。つまり、「死なないために」行為するということである。

実存は重みを引きずっている。(…) 純粹にして真っ直ぐでありうるだろう自己の実存運動は、曲ってその運動自体にはまり込み、存在動詞においてその再帰動詞という性格を明かしている。ひとは存在するのではない、ひとは自己を存在するのだ *on s'est*(EE38)²⁷

レヴィナスの論じる「眠り」において、自己は「ここ」に安らい、「ここ」には身体活動が潜在している。『実存から実存者へ』において自己を存在するとは、すなわち身体活動を活性化させ、働かせることである。自己を存在するという表現は、意味合いとしては、自己たらしめる *faire être soi* というようなニュアンスがある。

このような存在論および自己論を前提にして、レヴィナスは倦怠・怠惰・努力・疲労について分析する。レヴィナスによると、疲労は自己の存在からの遅れを示しており、努力によってその遅れを取り戻すことが試みられる。そして倦怠と怠惰は自己からの分離を示しており、前者は消極的な遺棄であり、後者は積極的な拒否である。レヴィナスは、朝「起きる(EE33)²⁸」という生命活動の開始行為と、「生存競争(EE29)²⁹」の再解釈としての自己保存の行為を象徴的に記述している。それはレヴィナスが「ここに存在する」ということを、身体の存在と自己の存在に結び付けたことと対応している。

レヴィナスは外的世界のないところでの主体の活動を、自らの場所において自己の存在を継続させるための、主体のその存在に対する支配として分析した。場所における自我はそのつど自らの存在を引き受け、あるいは引き受けない。それゆえ、レヴィナスはこの引き受けの運動を「誕生 naissance(EE30)³⁰」と呼んだ。自己の場所において自己の存在を作動させることで、そのつど主体が「誕生」する。このように引き受けられた存在の間隔が瞬間であり、世界なき自己のそのつどの現在なのである。

結 「私」と時間

レヴィナスは『実存から実存者へ』の導入部冒頭部で、動詞としての「実存」について語ることの困難を述べていた。

実存するという動詞、それについてはなにも言えないような、その分詞形——実存者 *existant*——、実存するものにおいてしか知解可能でないようなものに取り組もうとする思考に対しては、目まいのようなものがある(EE15)³¹

われわれはこの目まいを呼ぶような動詞について、レヴィナスの記述からあるという際立った出来事を読み取った。そしてわれわれは、定位という営みにおいて、場所にかかわる実詞 *substantif* と、身体という固有の存在 *être* の成立を見、生存競争の含意を、実存する実存者、すなわち分詞としての実存者 *existant*

として汲みとった。不定形の存在動詞、実詞、その人固有の存在動詞、動詞的性質と名詞的性質を分けもつものとしての分詞が登場したわけである。「逃走について」においては、不快感という、われわれが支配することのできない自己の存在が問題になっていたが、『実存から実存者へ』においては、自己の存在が一定程度支配されている。以上のことからわれわれは、レヴィナスが『実存から実存者へ』を構成する際にこのような品詞の分類を念頭に置いていたということ推定できるだろう。

レヴィナスはリトアニア出身であり、日常的にはロシア語を話していた。つまり、彼にとってフランス語は外国語であった。さらにレヴィナスはドイツ語でフッサールやハイデガーを研究し、英語でシェイクスピアを読むなど、語学に堪能であり、彼にとって外国語学習は大きな位置を占めていたと推定できる。ここにもレヴィナスの思想のなかに文法という問題を見出すことの間接的な理由を見出すことができるだろう。

最後に、存在という動詞をめぐるその時間ないし時制について、レヴィナスの思想展開の見通しをつけておきたい。レヴィナスは次のように述べていた。

思うに、時間は、瞬間の完遂する決定的接触の過剰を癒すために呼ばれている——そしてそれがこの研究を導く、時間の考え方についての根本主題である(EE147)³²

一人称主語としての「私」«je»が、自己同一性という自己に準拠する運動においてのみ捉えられるならば、前節でみたような瞬間において自足することになる。瞬間において、自我が自己を作動させる運動において、「私」は現在に存在する。つまり、『実存から実存者へ』において、「壊れた世界」が語られている箇所に限ってみれば、私の存在は常に現在形の *je suis* で表現されるものだと言えるだろう。

自己の存在との関係が差し迫ったものになる「瞬間」において、「私」は自己に対して、「決定的な接触」をしている。そこでは、例えば、「私」と現在の自己の存在との関係を解消し、過去の自己を作動させて«j'étais (私は...だった)»と言うことや、未来の自己を見通して«je serai (私は...だろう)»と言うこと

ができない。「現在」と「私」は自己への準拠の運動であり、それが自己同一性を構成している(E136)³³。自己（と定位）という装置だけでは、「私は存在する *je suis*」という枠組みから離れられないのである。

『全体性と無限』などにおけるレヴィナスの代表的概念たる他者の「顔 *visage*」は、しばしば「公現 *épiphanie*」という語とともに用いられるように、主体にとって「あと *épi*」から現前するものである。というのも、『全体性と無限』においては、自己のための世界に住む分離した主体が記述されたあとに顔との出会いが記述されるが、自己のための世界だったところにも、当然他者はすでにいたはずであり、他者の顔が主体の前に現れるのは、他者が誕生した「あと」のはずだからである。つまり、よく言われるように主体は他者に遅れを取っており、他者の顔は私に、なんらかの意味で、過去の存在を告げるものでありうる。その過去とは、歴史であるかもしれないし、「一度も現前したことのない過去」かもしれない。顔は«*j'étais*»などに表現されうるような、私の過去の存在との関連が深いように思われる。『実存から実存者へ』で示唆されているところだと、「他人の他性そのものによって自己の存在を許されること *se faire pardonner son être, par l'altérité même d'autrui*(E161)³⁴」という表現が顔との関係の内容に相当するだろう。

それに対して、レヴィナスのエロス論や繁殖性 *fécondité* 概念は私の未来と密接にかかわっている。実際、『実存から実存者へ』の結論直前部では、主体自身に回帰しない主体として、「繁殖的である」ことにおける可能性が提示され、ほぼ同時期のレヴィナスの講演「時間と他なるもの」においては、「私はなんらかの仕方ですの子である *je suis en quelque manière mon enfant*(TA86)³⁵」という破格の表現が導入される。

レヴィナス思想において、過去に割り当てられる他性も未来に割り当てられる他性も、主体と自己の接触という『実存から実存者へ』の現在概念を前提としているように思われる。われわれは、場所を前提とする自己の存在への再帰的關係にして閉じた瞬間たる現在として、レヴィナスの時間論の基礎を固定することもできたように思う。

註

1. 邦訳, 『困難な自由』, 69 頁.
2. 邦訳, 同書, 71 頁.
3. 邦訳, 同書, 71 頁.
4. 邦訳, 『倫理と無限』, 60 頁.
5. 邦訳, 『レヴィナス・コレクション』, 238 頁.
6. 時系列的にはレヴィナスの「逃走について」(1935)はサルトルの『嘔吐 La Nausée』(1938)に先行している。それゆえ、考えるべきはレヴィナスからサルトルへの影響であり、その逆ではない。
7. 邦訳, 同書, 146 頁.
8. Martin Heidegger, *Sein und Zeit*[1927], Neunzehnte Auflage, Tübingen, Max Niemeyer, 2006, S.6. 『存在と時間』, 細谷貞雄訳, 上巻, ちくま学芸文庫, 1994 年, 36 頁]
9. 邦訳, 『レヴィナス・コレクション』, 151 頁.
10. 邦訳, 同書, 170 頁.
11. ただし、本稿では『実存から実存者へ』の中間部にあたる「世界」については扱えなかった。
12. 邦訳, 『実存から実存者へ』, 122 頁.
13. 邦訳, 同書, 141 頁.
14. 邦訳, 同書, 128-129 頁.
15. レヴィ＝ブリュール『未開社会の思惟』, 山田吉彦訳, 上巻, 岩波書店, 1953 年, 94-95 頁.
16. « veille » と « réveil » は西谷訳ではともに「目醒め」とされているが、状態としての « veille » と反復される出来事としての « réveil » を区別するために、ここではそれぞれ「不寝 veille」「目覚め réveil」と訳し分ける。
17. 邦訳, 『実存から実存者へ』, 141 頁.
18. 邦訳, 同書, 150 頁.
19. 邦訳, 同書, 151 頁.
20. irruption は西谷訳だと「侵入」だが、あるに切れ目 rupture が入り、内部 in が成立するという文脈なので、「切開」と意識した。
21. 邦訳, 同書, 153-154 頁.
22. 邦訳, 同書, 149 頁.
23. イボスターズは語源的には「下に立つこと」という意味で、実体 substance, 実詞 substantif と語源的に通じている。西谷は『実存から実存者へ』「実詞化」訳注(16)で、哲学的には「イボスターズ」が動詞から実詞へという文法カテゴリーの移行を意味していたわけではないことを指摘している。とはいえ、レヴィナス自身が「イボスターズ, 実詞の出現は、たんに新しい文法的カテゴリーの出現であるだけではない。イボスターズは無名のあるの宙吊りを意味している」(EE141, 邦訳『実存から実存者へ』, 174 頁)と言っていて、レヴィナスの「イボスターズ」は不定形の存在から実詞への移行を含意している。
24. 邦訳, 同書, 38 頁.
25. 邦訳, 同書, 90 頁.
26. 邦訳, 同書, 175 頁.

27. 邦訳, 同書, 53 頁.
28. 邦訳, 同書, 47 頁.
29. 邦訳, 同書, 42 頁.
30. 邦訳, 同書, 43 頁.
31. 邦訳, 同書, 21 頁.
32. 邦訳, 同書, 180 頁.
33. 邦訳, 同書, 169 頁.
34. 邦訳, 同書, 196 頁.
35. 邦訳, 『レヴィナス・コレクション』, 295 頁.

参考文献

- Cristian Ciocan and Georges Hansel, *Levinas Concordance*, Dordrecht, Springer, 2005.
- Martin Heidegger, *Sein und Zeit*[1927], Neunzehnte Auflage, Tübingen, Max Niemeyer, 2006. [『存在と時間』, 細谷貞雄訳, 上下巻, ちくま学芸文庫, 1994 年]
- Jean-Luc Marion, “Note sur l’indifférence ontologique” in *Emmanuel Lévinas: L’éthique comme philosophie première*, Jean Greisch et Jacques Roland (dir.), Paris, Cerf, 1993.
- エミール・バンヴェニスト『一般言語学の諸問題』[1966], 岸本通夫監訳／河村正夫訳, みすず書房, 1983 年.
- リュシアン・レヴィ＝ブリュール『未開社会の思惟』[1910], 山田吉彦訳, 上下巻, 岩波書店, 1953 年.
- 石井雅巳「瞬間・メシア・他性—『実存から実存者へ』の時間論分析—」, 『哲学の探求』, 哲学若手研究者フォーラム, 第 42 号, 2015 年, 所収.
- 小手川正二郎『甦るレヴィナス』, 水声社, 2015 年.
- 関根小織「レヴィナスの懐疑と第一哲学としての倫理——「イリヤ」をめぐる」, 『倫理学年報』, 日本倫理学会, 第 48 号, 1999 年, 所収.
- 渡名喜庸哲「『全体性と無限』におけるビオス——クルト・シリングの注から出発して」, 合田正人編, 『顔とその彼方——レヴィナス『全体性と無限』のプリズム』, 知泉書房, 2014 年, 所収.
- 藤岡俊博「エマニュエル・レヴィナス『実存から実存者へ』におけるメシア的

時間」, 『年報地域文化研究』, 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻, 第9号, 2005年, 所収.

レヴィナスのテキストの略号

DE : *De l'évasion* [1935/1982], précédé d'un essai de Jacques Roland, Paris, Le Livre de Poche, 1998. [「逃走論」, 『レヴィナス・コレクション』, 合田正人編訳, ちくま学芸文庫, 1999年, 所収]

EE : *De l'existence à l'existant* [1947/1978], 2^e éd augmentée, Paris, VRIN, 1986. [『実存から実存者へ』, 西谷修訳, ちくま学芸文庫, 2005年]

TA : *Le temps et l'autre* [1948/1979], 10^e éd., Paris, PUF, « Quadrige », 2011. [「時間と他なるもの」, 『レヴィナス・コレクション』, 合田正人編訳, ちくま学芸文庫, 1999年, 所収.]

DL : *Difficile Liberté* [1963/1976], 4^e éd., Paris, Albin Michel, 1995. [『困難な自由』, 合田正人監訳／三浦直希訳, [増補版・定本全訳], 法政大学出版局, 2008年]

EI : *Étique et infini*, Paris, Fayard/France Culture, Livre de Poche, 1984. 略号: EI [『倫理と無限』, 西山雄二訳, ちくま学芸文庫, 2010年]

なお, 原典が示されているものについては, 既訳を参考にしつつ, 私の責任で訳出した.